

氏名（本籍）	宮澤 麻子		
学位の種類	博士（医学）		
学位記番号	博乙第	2981	号
学位授与年月	令和 3 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	時間外救急外来における不適切受診に関連する要因の検討		
主査	筑波大学教授	Ph.D.	近藤 正英
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	大戸 達之
副査	筑波大学講師	博士（医学）	河野 了
副査	筑波大学助教	博士（医学）	堀 愛

論文の内容の要旨

宮澤麻子氏の博士学位論文は、時間外救急外来における不適切受診に関連する要因を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章では、著者は本論文の研究背景として、救急外来の非緊急受診者による受診が各国で問題になっていること、日本の救急医療体制における不適切受診の特徴や対策の現状について述べている。また、不適切受診に関連する要因についての先行研究をレビューし、患者の属性、医療上の経験やニーズ、心理的な要因、信念について報告されてきていることを明らかにし、かつ、日本からの報告では、成人での不安・抑うつ症状やソーシャル・キャピタルについての報告がないことも明らかにしている。そして、本研究の目的を、緊急性の低い症状で、時間外に救急外来をウォークイン（直接来院）にて受診した患者のうち、診察担当医により時間外救急受診は不要だったと判断された患者を不適切受診として、同程度の症状で日中のプライマリ・ケア外来を受診した患者と比較して、不安や抑うつ、ソーシャル・キャピタルなどの心理社会的背景を含めた特性や受診理由を明らかにすること、また不適切受診に関連する要因を検討とすることとしている。

第 2 章では、著者は方法として、ER（Emergency Room）型救命救急センターを有する病院において、平日の時間外に救急外来に直接来院した患者、および同院で平日の日中に初診患者の外来診療を担う総合診療科外来を受診した患者を対象とし、発症 3 日以内で日本版トリアージスケール（Japan Triage and Acuity Scale: JTAS）トリアージレベル 4（低緊急）及び 5（非緊急）の成人患者について、患者および診察担当医に自記式質問票を配布し、患者の属性、発症時間、主訴、診断名、受療行動関連項目、心理社会的背景、受診理由を尋ねたことを述べている。さらに、救急外来で診察後に診察担当医により時間外救急受診の必要が無かったと判断されたものを不適切受診群、日中の総合診療科外来を受診した患

者を日中受診群とし、不適切受診群の特性や受診理由について2群の比較を行い、かつ、多変量解析を用いて不適切受診群に関連する要因を検討したことを述べている。

第3章では、著者は結果として、不適切受診群84例、日中受診群147例の分析結果を述べている。JTAS スケールは不適切受診群でレベル4（低緊急）が98.8%であり、日中受診群（57.1%）と比較して診察前の緊急性が高かった（ $P < 0.0001$ ）。発症時間は不適切受診群で数時間以内38.6%、半日前から26.5%、1日前から25.3%、2-3日前から9.6%で、日中受診群（9.7%、11.1%、30.6%、48.6%）と比較して短かった（ $P < 0.0001$ ）。不安と抑うつ、ソーシャル・キャピタルに日中受診群との有意な差は認められなかった。不適切受診群の診断名では、急性上気道炎、急性胃腸炎、機能的頭痛が51.1%を占め、受診理由は多いものから「早く治したかった」、「医師に診察してほしいかった」、「重病かどうか判断してほしいかった」であったが、日中受診群との有意な差は認められなかった。時間外救急外来でのみ尋ねた日中は学校や仕事が休めない」は38.7%であった。地域に夜間休日診療所があると答えた者は51.5%で日中受診群との有意差は認めなかったが、そのうち今回の症状で利用した者が54.3%で日中受診群と比較して有意に多かった（ $P = 0.01$ ）。2項ロジスティック回帰分析で検討した不適切受診に関連する要因は、過去の時間外救急外来受診回数が2回以上であること（参照：受診無し、オッズ比：3.19）であった。

第4章では、著者は考察として、過去の時間外救急外来受診回数が2回以上であると救急外来の不適切受診が約3倍起こりやすかったことから、時間外の救急受診に抵抗の少ない特定の者によって不適切受診行われている可能性が示唆され、不適切受診を防ぐための啓発は対象を頻回利用者に絞って行う方が効果的である可能性がある」と論じている。また、自然治癒する疾患が不適切受診の半数以上を占めているにもかかわらず早期回復や重病判断が主な受診理由であることから、疾患の自然経過やセルフメディケーション、時間外救急の受診判断基準についての啓発の必要性が示唆され、不適切受診の約4割が「日中は学校や仕事が休めない」からという自己都合によるものであったことから、時間外救急外来の役割の周知が不十分であることが示唆されたと論じている。さらに、夜間休日診療所があると知っている者のうち今回の症状で利用してからさらに救急外来も受診した者が不適切受診群で有意に多かったことから、疾患の自然経過の説明不十分、住民の検査希望、病院志向が示唆されたと論じている。不安や抑うつ、ソーシャル・キャピタルなどの心理社会的背景を含めた特性、受診理由、主訴で2群間に有意差が認められなかったことから、不適切受診患者は日中の外来と同じ感覚で抵抗無く時間外救急外来を利用している可能性が示唆されたと論じている。

第5章では、著者は結論として、過去の時間外救急受診回数が2回以上であると、過去の受診が無い場合と比較して不適切受診が約3倍起こりやすかったことを明らかにしたと述べ、不適切受診を防ぐための啓発が重要であると結んでいる。

審査の結果の要旨

（批評）

宮澤麻子氏の博士学位論文は、日本も含めた世界中の保健システム共通の課題である救急外来診療の不適切受診に関して、我が国での実態を明らかにすることを目的とした研究であり、ER(Emergency Room)型救命救急センターでの時間外救急外来における不適切受診に関連する要因の検討から、過去の時間外救急外来受診回数というユニークな要因の関連をみだし、不適切受診が特定の頻回受診者によって行

われている可能性を明らかにしている。この知見は啓発活動などを含めた今後の対策を進めるうえで有用なものである。

令和3年1月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学位論文審査等実施細則第11条を適用とし、免除とした。よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。